

# 弁護士と〇〇の間

新日鉄エンジニアリング株式会社法務・契約室シニアマネジャー/第二東京弁護士会会員 寺田 昌弘 Terada, Masahiro

## 1 リーガル・ビギナーの挑戦

「君は変幻自在にして神出鬼没だね」と部長に言われた会社もエンジニアであることも辞め、私は司法試験を受験した。バックパッカーの自分にとって、研究所に幽閉された毎日は、象使いに捕獲された子象が「ばおん」と鳴くようなため息ばかりの日々だった。安易だが、司法試験合格がビジネスの世界で自由を得る手段になるような気がしたのだ。

法科大学院在学中に旧司法試験に合格して就職活動してみると、うたい文句の「多様な人材」は求められていないように感じられた。法曹として自由になれるのか、それともエンジニアであったこととの隙間に落ち込んでしまうのかと不安になり、またため息をついていた。

ある日、法科大学院の資料室で伊藤正己先生の「裁判官と学者の間」(有斐閣、1993年)に出会い、何度も読んだ。憲法判例百選で補足意見を読んでから大ファンであったあの伊藤先生でも、初めて経験する裁判官と学者の間で不安を感じたと書かれていたからだ。自分の不安感は当然で、見えないどこかの隙間に落ちたとしてもそれを積極的に利用できないのかも、と思うようになった。

## 2 インハウス・ロイヤーの誕生

「名刺に弁護士って書けた方がカッコいいよ」とゼミの教授に言われて弁護士登録をした。現行62期司法修習を終えて既に当社で働き始めており、業務上は登録の必要がないため迷っていたのだが、カッコいいと言われて登録してみることにした。企業内

弁護士の誕生である。

業務内容は、各種契約書の作成・チェック、訴訟等の管理、社内各部署からの法律相談などである。海外案件も多く、ピーク時は訴訟以外のほとんどの時間を英文契約書に費やすこともあるが、一般的な企業の法務部門や他の企業内弁護士と私とは業務内容におそらく大差なく、決して「新しい」仕事ではない。差があるとすれば、私がうろろする以下二つの「間」の存在である。

## 3 そこもなんとか

「このケースの数値計算もお願いします」と依頼される弁護士は多くないと思う。私と他の多くの法務部員や企業内を含む弁護士とで差があるとすると、エンジニアであったかつての自分がときどき覚醒することがその一つだ。ある紛争案件の事実調査において、社内の技術者の説明に納得できず、自ら物理的現象の数値シミュレーションを行って外部の代理人弁護士へ説明したところ、代理人から前記のように私が依頼された。

周囲を見ると、弁護士と技術者が直接情報交換をした場合、弁護士からは法的要件・効果の考え方が、技術者からは技術の要素や重要性が、それぞれ相手方にうまく伝わっていない。論理的な思考が得意な(はずの)両者だが、論理性以外の部分は結構排他的である。これを回避してビジネスの現場に生産性をもたらすには、外部か企業内かを問わず、「法曹の脳半分、技術者の脳半分」の弁護士の存在が効果的である。私は、技術に関する内容を含む書面を作成する場面では、技術者には法律文書で求められ

るものを説明し、外部の弁護士には技術者の説明を自分の言葉で通訳する。場合によって、「この技術の説明はこの通り書いてね」と例文まで作って技術者に具体的に指示したり、計測制御用コンピュータシステムの説明文書を自分で一から作成したりという力技での解決もする。

恋愛を客観的に分析するときに男女の異なる考え方を統合するように、異なる二つの脳を一つの意思の下で最適に活用するのである。これはエンジニアの見方・考え方を完全に併せ持った法曹が付加価値を提供できる一場面だ。「弁護士とエンジニアの間」はポジティブな「間」であり、パラダイスである(自分は業務量が増えて泣くのだから)。

#### 4 現代法務部へのカタバシス

「弁護士であることは業務に不要である」との理由で、弁護士登録は完全に自己負担である。会費は自己負担で手当なし、必修の研修や委員会等最低限の公益活動へ業務時間中に参加することも会社から認められておらず、有給休暇を利用する。企業内弁護士誕生と書いたが、私の場合、弁護士登録を会社から許容されているにすぎない(結局、名刺には弁護士と書いてない)。

弁護士であることが不要ということは、その資格・能力を提供する義務がないわけで、ある意味楽ちんである。例えば、訴訟管理をより積極的に行うよう業務改善をしたくても、登録で得られた外部の弁護士との交流や研修の機会に獲得した知見やスキルをもって可能となることならば、頑張りすぎということになる。登録の負担を全てする私が一種の搾取をされて損になるのは嫌だが、これでは、私はスキル向上の機会を失い、会社は社員の能力をいかせない。「弁護士と会社員の間」は、ネガティブな「間」であり、冥界である。

状況打開のため、弁護士からそうでない会社員に変身できる能力を独学で身につけた。弁護士である私は、魔法で会社員に変身し、弁護士の頭を使いつつ気配は殺している。弁護士の顔と会社が求める会

社員の顔とを、無理に融合させずに使い分けている(魔法が使えず変身できない人は、企業内弁護士としては苦勞することが多いと思う)。

この使い分けにより、弁護士であることをより強く意識するようになった。安心して変身するには、いつでも元の姿に戻れなければならない。先生と呼ばれない立場の気楽さに安住して強力な魔法が解けなくなり、会社の外で弁護士として通用しなくては困る。冥界に降りたままにならないためには、内面において弁護士であろうと意識し続ける必要がある。各種研修、公益活動などへは、会社の業務に直接関係なくても(だからこそ)意欲を持ち続け、いつか冥界に光をもたらしたい。

#### 5 今日も明日もその先も

「なぜエンジニアから法曹へ？」と尋ねられるたびに答えに困ってきた。理由がないからではなく、質問するほどのこととは思えないからだ。そんな法曹が探す「新しいフィールド」には様々な形があるはずだ。遠い未開の荒野に限らず、超ひも理論が前提とする余剰次元のように折り畳まれていて、「弁護士と何かの間」として身の回りに存在しているかもしれない。そこへ行けるのは、きっと、容易に目にできるこの世には拘束されない自由な粒子だけなのだ。

それなら私は自在に姿を変え、観測するまで姿を確認できない素粒子のようにどこへでも現れた。伊藤先生のように、小野篁が六道珍皇寺の井戸を降りるように、自由に弁護士とエンジニアや会社員の間を行き来する。端から端へ「間」を通り抜けるだけでなく、両方の能力を常に最適な割合で併せ持ち、「間」の中で活動できる。必要に応じて変身もするが、元の弁護士にいつでも戻れるよう準備は怠らない。

そうやって、私はバックバックに自由と正義を詰め、今日も明日もあざっても、「弁護士と〇〇の間」という名のパラダイスや冥界を、行ったり来たりするのである。